

コロナ禍における TCU のオンライン教育に関する研究

—— TCU 生の信仰の成長や霊的形成に着目して ——

岡村直樹、徐有珍

(協力：高橋信希、立山剛)

I コロナ禍の大学教育と本研究の概要

2019 年の年末から感染の拡大が始まった新型コロナウイルス (COVID-19) は、2020 年 3 月 11 日、世界保健機構 (WHO) のテドロス事務局長によって正式にパンデミックとして認定された⁽¹⁾。2020 年 9 月 5 日現在で、世界で約 2,650 万人の累計感染者と約 83 万人の死者を数えている⁽²⁾。日本においても、2020 年 9 月 5 日現在、都市部を中心に約 7 万人の感染者と約 1400 人の死者が出て⁽³⁾いる。2020 年 4 月 7 日、安倍総理大臣 (当時) は、改正新型インフルエンザ等対策特別措置法第 32 条第 1 項の規定に基づき、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県、及び

(1) パンデミックとは、感染症や伝染病が世界的に大流行する状態を指す。現代では航空機など交通機関が発達しているため、一度感染症が発生すると瞬く間に世界中に広がり、多くの感染者が同時期に散発的に発生する可能性がある。歴史的には、14 世紀にヨーロッパで流行した黒死病 (ペスト)、19–20 世紀にかけて地域を変えながら 7 回の大流行を起こしたコレラ、1918–1919 年にかけて全世界で 2,500 万人が死亡したといわれるスペインかぜ (インフルエンザ) がこれにあたる。(公益社団法人日本薬学会「用語解説」<https://www.pharm.or.jp/dictionary>：2020/9/6 確認)

(2) 世界保健機構ホームページ (<https://covid19.who.int/>：2020/9/6 確認)

(3) NHK コロナ特設サイト (<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data-all/>：2020/9/6 確認)

福岡県の7都府県に対して緊急事態宣言を発出した。⁽⁴⁾この緊急事態宣言により、公共交通機関など必要な経済社会サービスは可能な限り維持しながら、密閉、密集、密接の3つの密を防ぐという感染拡大防止対策がとられることとなった。しかし2020年5月25日の緊急事態宣言解除宣言の後も感染の拡大は収束せず、2020年8月初旬の第二波のピークを経て現在に至っている。

コロナウイルスの感染は、2020年9月の時点でも日本社会の様々な営みに多大な影響を与え続けており、大学教育も例外ではない。文部科学省（以下文科省）は、感染の拡大が世界規模で始まった2020年1月より、管轄する大学、大学院、高専（高等専門学校）に対して繰り返し注意喚起を行いつつ、3つの密を防ぐという観点から、対面式の卒業式の実施方法の変更や延期を要請し、多くの大学、大学院、高専はその要請に応え、必要な対応を実施した。⁽⁵⁾また2020年3月24日、文科省は、「令和2年度における大学等の授業の開始等について」という文書の中で、コロナウイルス感染拡大防止の観点から、新学期の開始時期の延期と、対面授業の代わりに遠隔授業の実施を促す通知を行った。⁽⁶⁾この通知を受け、2020年5月13

(4) 首相官邸ホームページ(https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/202004/07corona.html：2020/9/6 確認)

(5) 文部科学省『学校の卒業式・入学式等の開催に関する考え方について』（事務連絡：令和2年2月25日）より、以下原文「感染が発生している地域におきましては、学校の設置者において、実施方法の変更や延期などを含め、対応を検討していただくようお願いします。」(https://www.mext.go.jp/content/20200225-mxt_kouhou02-000004520_02.pdf：2020/9/6 確認)

(6) 文部科学省『令和2年度における大学等の授業の開始等について』（通知：元文科高第1259号、令和2年3月24日）より、以下原文「入学式等の年度初頭の行事の実施に際しては、地域の実態を踏まえ、上記の3つの条件が重なることのないよう、それぞれの学校行事の態様の特徴に応じて、感染拡大防止の措置や開催方式の工夫等の措置を講じたり、延期したりする等の対応を適切に行うこと。なお、地域における感染症の発生状況や学生の状況等を踏まえ、当初の予定通りに授業等を開始することが困難である場合には、設置者の判断で授

日の時点で、日本の国立大学の 90.7%、公立大学の 82.9%、私立大学の 87%、高専の 87.7% が、授業開始時期を延期した。さらにすべての国公立大学と高専が、また 98.5% の私立大学が、遠隔授業の実施、または検討を行った。⁽⁷⁾ 緊急事態宣言解除以降は、対面授業を再開する大学院、高専が増え、文科省による「7 月 1 日（水）時点における授業の実施方法について」という調査報告では、全体で、対面授業のみ実施の学校が 16.2%、遠隔授業のみ実施の学校が 23.8%、双方を併用する学校が 60.1% となった。⁽⁸⁾

本稿の執筆者が所属する東京基督教大学（TCU：千葉県印西市）では、学部と大学院、および専攻科において、新型コロナウイルス感染予防の一環として、以下のような取り組みが実施された。

- (1) 3 月 6 日の春期卒業式における時間の短縮と参加人数の制限を実施した。
- (2) 春学期の開始を遅らせ、5 月 4 日を授業開始日、7 月 10 日を授業終了日とした。⁽⁹⁾
- (3) 春学期の対面授業を見送り、全面オンライン授業（遠隔授業）とした。
- (4) 春学期中は一部留学生の滞在を除き、独身寮の閉鎖を決定した。
- (5) 夏期卒業式の予定を 7 月 10 日から 7 月 29 日に変更し、卒業生と一部教職員以外は原則オンラインによる参加とした。

業等の開始時期の延期等を行うことを妨げるものではないが、その検討を行う場合は、多様なメディアを高度に利用して行う授業（以下「遠隔授業」という。）の活用などによる学修機会の確保に留意すること。」（https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf：2020/9/6 確認）

- (7) 文部科学省による調査報告『新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について』（令和 2 年 5 月 13 日、https://www.mext.go.jp/content/20200513-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf：2020/9/6 確認）
- (8) 文部科学省による調査報告『新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況』（令和 2 年 7 月 17 日、https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf：2020/9/6 確認）
- (9) 東京基督教大学では、年間三学期制をとっている。

(6) 秋学期の授業開始日を8月31日とし、オンライン授業と対面授業の双方を実施することとした。

(7) 秋学期の独身寮の限定的再開を決め、一部学生が寮に戻った。

2020年9月10日現在、TCUでは、「オンライン授業」「対面授業」「オンラインと対面のハイフレックス (HyFlex) 授業」の3種類の授業が実施されているが、依然としてオンライン授業が全体のクラス数の約8割、また述べ学生数の9割以上を占めている。対面授業は、実技が必要不可欠な福祉科目、教会音楽科目を中心に、少人数クラスや個人レッスンにおいて実施されている。ハイフレックス授業とは、対面とオンラインのハイブリット型の教育を柔軟に設計するコース設計モデルである。現在は3人の教員が、それぞれひとつのハイフレックス授業を担当するに留まっている。オンライン授業には、教科書やその他の資料を読んで課題を提出する授業のタイプに加え、主に教員が作成した講義内容の動画を視聴する授業タイプ、そしてオンライン会議システム (ZOOM 等) を使用した相互コミュニケーションのある授業タイプの3つが存在する。講義内容の動画を視聴して受講するタイプの授業は、学生が自分の都合に合わせて受講できることからオンデマンド授業とも呼ばれる。2020年度の春学期、TCUではひとつのオンデマンド授業を除き、すべてのオンライン授業がZOOMを用いた相互コミュニケーションのある授業として実施された。

対面授業から全面オンライン授業への移行は、多くの大学生の中で精神的ストレスを生じさせていることがわかっている。例えば東京大学相談支援研究開発センターでは、「学業や将来に関すること等への不安や恐怖」「家で過ごす時間が長くなることに伴う孤独感、倦怠感」「主体性や自由が失われること、過度の我慢を強いられることに対する怒り」「従来のサポートやケアが得られなくなることによる精神的苦痛」といった具体例を挙げ、注意喚起を行っている⁽¹⁰⁾。このような情報を念頭に、オンライン授業を

(10) 「学生の皆さまへ—新型コロナウイルス感染症に関連する対応について—」

受講し、オンラインの学生生活を送る学生の生の声を聞くため、春学期中の2020年の6月中旬から7月中旬の約1ヶ月に渡って、無記名アンケート調査、グループインタビュー調査、そして個人インタビュー調査がオンラインで実施された。本研究の目的は、これらの調査から得られたデータを分析し、学生の信仰の成長や霊的形成に着目しつつ、それを教育の改善や学生のケアに結びつけることである。

キリスト教における「信仰」とは「神を信頼する」ことを指す。⁽¹¹⁾「信仰」と同様に「霊」も目に見えないものであり、それは神が人間に与えるものであると聖書には記述されている。⁽¹²⁾したがって「信仰の状態」とは、神への信頼の度合い、「信仰の成長」とは、神への信頼が増し加わること、さらに「霊的形成」とは目に見えない「信仰」が、形作られていくことをそれぞれ指すと捉えることが出来る。TCUは入学生に対してクリスチャンコード（キリスト教の洗礼を受けた者のみに入学を許可する選考基準）を持つ大学でもあり、これらはTCUのキャンパスにおける学生の会話からも頻繁に耳にする言葉である。「信仰」、そしてその「成長」や「形成」は、クリスチャンのセルフ・アイデンティティーと深く関わっており、自らを信者（クリスチャン）と認識する者にとっては、特に重要なボキャブラリーでもある。さらにTCUのような「信者」を対象に教育を行うキリスト教大学が、学生の心のケアを考える上で避けて通ることのできない大切な宗教的視点でもあると言えるだろう。

実施された無記名アンケート調査、グループインタビュー調査、そして個人インタビュー調査からは、量的データと質的データが収集された。量的データと質的データの双方を用いる研究の方法は、混合研究とも呼ばれている。混合研究とは、複雑な現象をマクロレベルとミクロレベルの両方で調査し、個人の文脈に埋め込まれた、深くて多様な視点や経験を捉えつ

東京大学相談支援研究開発センター (https://dcs.adm.u-tokyo.ac.jp/scc/wp-content/uploads/2020/04/COVID-19_student_20200402.pdf : 2020/9/6 確認)

(11) 「信仰」新聖書辞典（いのちのことば社、2014年、724頁）

(12) 「霊」新聖書辞典（いのちのことば社、2014年、1546頁）

つ、現象の全体像にも目を向ける研究方法である。⁽¹³⁾ 混合研究法の強みは、「数値による傾向とその詳細を取り扱うことにより問題の深い理解がえられること」や「ある現象に関して現場での意味を維持しながら客観化を行うことができる」と考えられており、本研究の目的に合致するものであること⁽¹⁴⁾から採用された。

II 量的調査とその結果

① 量的調査の概要

無記名のオンラインアンケート調査は、2020年6月の時点でのTCUの全学生170人（休学中の学生を除く）に対して実施された。回答は124人から寄せられ、有効回答の割合は72.94%となった。124人の中には、英訳されたアンケートに回答した12人の英語話者が含まれていたが、英語アンケートには、日本語のアンケートと内容の異なる部分が一部あったため、本稿ではそれら12人から得られたアンケートの回答を除く、112人の日本在住の日本語話者からの回答のみをデータとして用いることとした。⁽¹⁵⁾ その場合、英語話者に送られたアンケートの総数の21を差し引いた149が母数となり、有効回答の割合は75.17%となった。内訳は、学部1年生24人、2年生20人、3年生21人、4年生24人、大学院1年生14人、2年生7人、専攻科生2人であった。

アンケートの質問は、上記の調査目的に沿って、TCUの教務課を中心に、複数の教員と職員の相談を経て決められた。そこには、①オンライン授業の環境に関する質問（13問）、②オンライン授業の内容や方法に関する

(13) 日本混合研究法学会ホームページ <http://www.jsmmr.org/home>（2020/12/10 確認）

(14) 樋口倫代「現場からの発信手段としての混合研究法：量的アプローチと質的アプローチの併用」（日本国際医療学会、*Journal of International Health*, 26, no. 2 [2011]: 107-117.

(15) 海外居住者の場合、社会環境や生活環境等が日本居住者と大きく異なることが想定されるため、本研究では対象から除外することとした。

る質問（23問）、③信仰生活に関する質問（9問）、④寮や通学に関する質問（19問）、という4つのカテゴリーが設けられた。アンケート調査質問数は64問と、その量が多く、また内容も多岐に渡っており、限られた論文誌面において全てを取り扱うことは困難であると判断された。したがって、本稿の量的調査の部分では、本研究の目的を踏まえた上で、③「信仰生活に関する質問」という項目の中で取り扱われた質問に対する回答を研究データとして中心的に用いることとした。回答の方式には、「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」といった5択回答式に加え、該当する項目すべてにチェックを入れる複数回答式、そして自由記述回答式の3種類が用いられた。本章ではアンケート調査の量的データ（5択回答と複数回答）のみを扱い、次章以降で質的データ（自由記述回答）を扱う。以下に、無記名アンケートの質問と回答を記す。

信仰生活に関する質問

1a) あなたの現在の「心の健康状態（精神的な健康）」は、良好ですか。

回答 [とても良好 20.5%、まあまあ良好 44.6%、どちらとも言えない 8.9%、あまり良好ではない 22.3%、まったく良好ではない 3.7%]

1b) 上の質問で「あまり良好ではない」「まったく良好ではない」と答えて下さった方に質問します。その理由は、新型コロナウイルスの蔓延と「直接的、または間接的」に関係していると思いますか。

回答 [とてもそう思う 46.7%、ややそう思う 30%、どちらとも言えない 10%、あまりそう思わない 6.6%、まったくそう思わない 6.7%]

2a) あなたの現在の「信仰の状態」は、良好ですか。

回答 [とてもそう感じている 20.5%、ややそう感じている 43.7%、どちらとも言えない 17.9%、あまりそう感じていない 10.7%、まったくそう感じていない 7.1%]

2b) 上の質問で「あまりそう感じていない」「まったくそう感じていない」と答えて下さった方に質問します。その理由は、「新型コロナウ

イルスの蔓延」と直接的、または間接的に関係していると思いますか。
回答 [とてもそう思う 30.8%、ややそう思う 22.7%、どちらとも言えない 13.6%、あまりそう思わない 9.1%、まったくそう思わない 22.7%]

3) 春学期中のこれまでのあなたの「礼拝出席の形態」を教えてください。
(複数回答可)「その他」を選択したら、具体的に礼拝出席の形態を入力してください。

回答 [教会に集まる通常の礼拝 55.4%、オンライン同時型礼拝 (ZOOM、YouTube ライブ配信等) 65.2%、オンライン・オンデマンド礼拝 (YouTube 録画等) 24.1%、その他はすべて 1% 以下]

4) 春学期中 (オンライン授業期間中) に、あなたの信仰の成長や霊的形成に「ポジティブな影響」を与えているのは何だと思いますか? (複数回答可)

回答 [個人のデボーション⁽¹⁶⁾ 54.5%、教会生活 50.9%、オンライン授業の内容 50%、小グループチャペル⁽¹⁷⁾ 40.2%、チャペル・メッセージ動画 33%、デボーションガイド⁽¹⁸⁾ 13.4%、TCU のオンライン祈祷会⁽¹⁹⁾ 28.6%、TCU 生とのオンラインでの交わり⁽²⁰⁾ 52.7%、TCYouTube⁽²⁰⁾ 14.3%、わからない 4.5%、その他はすべて 1.8% 以下]

5a) あなたには、「ネット環境以外」の生活全般 (人間関係や教会生活等を含む) について悩みがあるとき、相談できる人はいますか?

回答 [いる 80.4%、いないが欲しい 9.8%、いないし、欲しいと思わない 3.5%、どちらともいえない 6.3%]

5b) 「相談相手がいる」と答えた方に伺います。相談相手は誰ですか? (複数回答可)

(16) 個人で聖書を読んだり祈ったりすること

(17) 担任教員と学生 (5-10 名ほど) が週に 1 回、約 30 分オンライン上で集まって持たれる集まり

(18) 学生の個人デボーションをサポートするために大学が作成しているガイド

(19) 学生が大学を介さず、自主的に集まって開いている祈りの会

(20) 大学の職員と有志の学生が作成している 30 分ほどの YouTube 番組

回答 [TCU 教員 15.7%、TCU 職員 6.7%、牧師 33.7%、教会の人（牧師以外） 28.1%、親 55.1%、兄弟姉妹 28.1%、TCU の友人 66.3%、TCU 以外の友人 53.9%、家族 5.6%、その他はすべて 1.1% 以下]

- 6) 新入生以外の学生さん（学部から大学院へ進んだ学生さんも含みます）に質問します。「2020 年の春学期以前の TCU 生活」を振り返って、あなたの信仰の成長や霊的形成に大きな影響を与えたものは何だと思いますか？（複数回答可）「その他」を選択したら、具体的に影響を与えたものを入力してください。

回答 [個人のデボーション 45.5%、教会生活 67.5%、TCU でのチャペル⁽²¹⁾ 51.9%、寮での生活 59.7%、授業の内容 57.1%、教員との交わり（授業内・外での） 44.2%、職員との交わり 28.6%、TCU 生同士の交わり 74%、TCU での祈祷会 45.5%、TCU での委員会やサークル活動 41.6%、スプリングリトリート 53.2%、シオン祭⁽²²⁾ 31.2%、夏期伝道 50.6%、家族 2.6%、その他はすべて 1.3% 以下]

② 量的調査の結果分析

上記の「信仰生活に関する質問」に対する回答を振り返りつつ、主にクロス・リファレンスを用いた量的データの分析から浮かび上がってきた、特筆すべき事柄を、5 つの項目に分けて以下に紹介する。

(a) TCU 生の精神的健康状態と信仰の状態の良好さの間には、明らかな「正の相関関係」⁽²³⁾が見られる。

(21) 火曜日から金曜日まで、毎日 30 分のチャペル

(22) 1 年に 1 回、2 泊 3 日で実施されている全校生徒を対象にした、各自の信仰について考える研修旅行

(23) 「相関関係：一方が増加するとき、他方が増加もしくは減少する傾向が認められるという、二つの量の関係。一方が増加するとき、他方が増加する傾向が認められるならば、それらの間には正の相関関係があるといい、減少する傾向が認められるならば、負の相関関係があるという。」精選版日本国語大辞典（小学館、2006 年、アプリ版より）

「心の健康に関する質問」(1a)で、精神的健康状態が「とても良好」と回答した学生のうち、96%が(2a)においても信仰の状態が「良好」または「まあまあ良好」と回答している。また(2a)で、信仰の状態が「とても良好」と回答した学生のうち91%が、精神的健康状態が「とても良好」または「まあまあ良好」と回答している。

加えて、精神的健康状態が「とても良好」と回答した学生の中で、信仰の状態が「まったく良好ではない」と回答した学生は0%、「あまり良好ではない」と回答した学生は7%となった。また信仰の状態が「とても良好」と回答した学生の中で、精神的健康状態が「まったく良好ではない」と回答した学生は0%、「あまり良好ではない」と回答した学生も0%であった。学生の精神的健康状態と信仰の状態の良好さ(ポジティブな自認)には明らかな正の相関関係が見られた。すなわち精神的健康状態が良いと自認する学生は、ほとんどの場合、信仰の状態も良好であると自認しており、またその逆も然りであるということである。

一方、精神的健康状態が「まったく良好ではない」と回答した学生の中で、信仰の状態が「あまり」または「まったく良好ではない」と回答した学生は75%となり、その逆、すなわち信仰の状態が「まったく良好ではない」と回答した学生の中で、精神的健康状態が「あまり」または「まったく良好ではない」と回答した学生もまた75%であった。ネガティブな自認に関しては、その回答の母数がポジティブな自認の2割以下となっているが、やはりそこには正の相関関係を見ることができる。

精神的健康状態の良好さに関しては、たとえそれが非常に主観的な自認であっても、そこには社会の中の多くの人が共有できると感じる、ある程度客観的な指標が存在する。⁽²⁴⁾ 一方、TCUのような小さなキリスト教主義

(24) 厚生労働省はホームページの中で以下のような「心の健康の定義」を語っている「こころの健康とは、世界保健機関(WHO)の健康の定義を待つまでもなく、いきいきと自分らしく生きるための重要な条件である。具体的には、自分の感情に気づいて表現できること(情緒的健康)、状況に応じて適切に考え、現実的な問題解決ができること(知的健康)、他人や社会と建設的でよい関係を

学校の中であっても、「信仰の状態の良好さ」とは何であるかに関しては、そこに精神的健康状態の良好さのような客観的な指標があるわけではない。しかし「信仰の状態は良好である」という学生の自己認識は、信仰者である学生を対象とする TCU のような教育機関にとって非常に重要であると言えるだろう。

(b) TCU 生の精神的健康状態と信仰の状態は、新型コロナウイルスの蔓延に大きな悪影響を受けている。

心の健康に関する質問の (1b) では、以下のような問いかけがなされた。『あなたの現在の「心の健康状態（精神的な健康）」は、良好ですか。』という質問に対して『あまり良好ではない』『まったく良好ではない』と答えて下さった方に質問します。その理由は、新型コロナウイルスの蔓延と『直接的、または間接的』に関係していると思いますか。」回答からは、「あまり良好ではない」と答えた学生の 76% が、また「まったく良好ではない」と答えた学生の 75% が、「新型コロナウイルスの蔓延が影響している」と回答している。

同様に、心の健康に関する質問の (2b) では、「あなたの現在の「信仰の状態」は、良好ですか。」という質問に対し、『あまりそう感じていない』『まったくそう感じていない』と答えて下さった方に質問します。その理由は、『新型コロナウイルスの蔓延』と直接的、または間接的に関係していると思いますか。」という問いかけがなされた。「あまりそう感じていない」と答えた学生の 58% が、また「まったくそう感じていない」と答えた学生の 50% が、「新型コロナウイルスの蔓延が影響している」と回答している。

これらの数字から、学生の精神的健康状態と信仰の状態の双方が、新型

築けること（社会的健康）を意味している。人生の目的や意義を見出し、主体的に人生を選択すること（人間的健康）も大切な要素であり、こころの健康は「生活の質」に大きく影響するものである。」(https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/kenko21_11/b3.html : 2020/9/10 確認)

コロナウイルスの蔓延の悪影響を受けていることがわかった。しかし一方で、精神的健康状態に対する悪影響は76%と75%、信仰の状態に対する悪影響は58%と50%であったことから、新型コロナウイルスの蔓延は、学生の精神的健康状態に対して、より強く影響していることもわかった。

(c) 相談相手の不在は、TCU 生の精神的健康状態と信仰の状態に悪影響を与えている。

心の健康に関する質問の(5a)では、「あなたには、『ネット環境以外』の生活全般(人間関係や教会生活等を含む)について悩みがあるとき、相談できる人はいますか?」という問いかけがなされた。相談相手がいると答えた学生は80.4%であった。

全国大学生生活協同組合連合会(全国大学生協連)が、2016年に日本全国の大学生を対象に実施したアンケート調査では、20,115人の回答者の83.5%が、相談相手がいると答えている⁽²⁵⁾。また2013年に株式会社クロス・マーケティング(マーケットリサーチ会社)が実施した同様のアンケートでは、対象となった766人の大学生のうち、84.9%が、相談相手がいると答えており、TCUの80.4%は、ほぼ全国平均並と言える⁽²⁶⁾。しかし上記2件のアンケート結果は、2013年と2016年の新型コロナウイルス感染拡大以前のものであり、コロナ禍の数字としての80.4%の意味の吟味は今後の課題である。

一方、相談相手の不在と、精神的健康状態および信仰の状態の関係性については以下のようなことが明らかとなった。「相談相手がいる」と回答した学生の中で、心の健康状態が「あまり良好ではない」または「まったく良好ではない」と答えた学生は15%であったのに対して、「相談相手が

(25) 全国大学生生活協同組合連合「学生生活実態調査(学調)」(https://www.univcoop.or.jp/about/24hour/24hour_14.html : 2020/9/8 確認)

(26) 「先輩に聞きました。身近に相談相手、いる?」調査:株式会社クロス・マーケティング、調査サンプル:大学生766人、調査期間:2013年11月10日-11日 (<https://journal.rikunabi.com/p/break/souken/7872.html> : 2020/9/9 確認)

いない」と回答した学生の中で、心の健康状態が「あまり良好ではない」または「まったく良好ではない」と答えた学生は67%であった。そこには50%以上の開きが見られた。また「相談相手がいる」と回答した学生の中で、信仰の状態が「あまり良好ではない」または「まったく良好ではない」と答えた学生は9%であったのに対して、「相談相手がいらない」と回答した学生の中で、信仰の状態が「あまり良好ではない」または「まったく良好ではない」と答えた学生は53%であり、そこには50%近い開きが見られた。相談相手の不在は、TCU生の精神的健康状態に加え、信仰の状態にも悪影響を与えているというアンケート結果をそこに見ることができた。

(d) TCU生は、TCUの友人に対して、相談相手としての役割を果たしている。

心の健康に関する質問の(5b)では、『「相談相手がいる」』と答えた方に伺います。相談相手は誰ですか？(複数回答可)』という質問がなされた。複数回答を可とした結果、相談相手が以下の順番で明らかとなった。

TCUの友人(66%)、親(55%)、TCU以外の友人(54%)、牧師(34%)、兄弟姉妹(28%)、教会の人(28%)、TCU教員(16%)、TCU職員(7%)

2015年に全国の大学生を対象に、株式会社トモノカイ(学生向けメディア事業や家庭教師の斡旋等を行う会社)によって実施されたオンラインアンケート調査では、同様の質問に対して以下のような結果が出た。⁽²⁷⁾

自分の大学の友人(51%)、両親(32%)、自分の大学以外の友人(32%)、兄弟(9%)、バイト先の同僚(7%)、先生(7%)、その他(4%)

双方を比較すると相談相手の順位は、ほぼ同様であることがわかる。しかしTCUの友人(66%)は、2015年の調査結果より15%多く、3人に2

(27)「大学生生活の悩みに関するアンケート」調査会社：株式会社トモノカイ、調査方法：WEBアンケート、調査対象：t-news会員、有効回答数：499人、調査日時：2015年10月26日(月)–2015年11月08日(日)、(<https://www.tnews.jp/entries/23751>：2020/9/9 確認)

人の TCU 生が、他の TCU 生を相談相手としていることがわかった。

(e) TCU 生の信仰の成長や霊的形成に対する「ポジティブな影響」が、コロナ禍で大きく減少する中、オンライン授業のもたらす好影響の減少度は少なく保たれている。

心の健康に関する質問の(4)では、「春学期中（オンライン授業期間中）に、あなたの信仰の成長や霊的形成に「ポジティブな影響」を与えているのは何だと思いますか？（複数回答可）」という質問が、さらに(6)では、「新入生以外の学生さん（学部から大学院へ進んだ学生さんも含みます）に質問します。『2020年の春学期以前の TCU 生活』を振り返って、あなたの信仰の成長や霊的形成に大きな影響を与えたものは何だと思いますか？」という質問がなされた。コロナ前とコロナ禍を比べるという意図で出された質問に対する答えからは、学生の信仰の成長や霊的形成に対して、「ポジティブな影響」を与えていたものが大きく変わったことがわかった。具体的には、以下のような変化が記録された。

コロナ前の好影響：TCU 生同士の交わり（74%）、教会生活（68%）、寮での生活（60%）、授業の内容（57%）、スプリングリトリート（53%）、TCU でのチャペル（52%）、夏期伝道（51%）、TCU での祈禱会（46%）、個人のデボーション（46%）、教員との交わり（44%）、TCU での委員会やサークル活動（42%）、シオン祭（31%）

コロナ禍の好影響：個人のデボーション（55%）、TCU 生とのオンラインでの交わり（53%）、教会生活（50%）、オンライン授業の内容（50%）、小グループチャペル（40%）、メッセージ動画（33%）、TCU のオンライン祈禱会（29%）、デボーションガイド（13%）

特筆すべき部分は、コロナ前の信仰の成長や霊的形成に対する好影響が「TCU 生同士の交わり」や「教会生活」といった他者との関わりが上位であったのに対し、コロナ禍では、「個人のデボーション」という個人的活動が最上位となったことだろう。寮が閉鎖され、自宅等に留まることが多くなったコロナ禍においては当然の結果であると言える。コロナ前の好影

響が軒並み2桁台の下降を見せている一方、ある程度踏み留まっているのが「授業」の影響であった。コロナ前の「授業」の好影響が57%であったのに対し、コロナ禍での「授業」の好影響は50%となっている。コロナ禍での授業は、対面からオンラインへと、その形態を大きく変えたにもかかわらず、その好影響はある程度維持されているということになる。

ちなみに授業の評価に関しては、アンケート調査の「②オンライン授業の内容や方法に関する質問」の中で、以下の2つの質問がなされた。「オンライン授業全体を振り返って、あなたの満足度を教えてください。」「春学期のオンライン授業は、あなたの『将来の備え』のために必要な学びであったと思いますか？」前述の質問に対して、「とても満足している」「ある程度満足している」という回答の合計は83%であった。また後述の質問では、「とてもそう思う」「ややそう思う」の合計が85.7%に達した。2020年7月の東京大学新聞社による学生のオンライン授業の満足度に関する調査では「とても満足している」「まあ満足している」の合計が69.6%⁽²⁸⁾であったことや、同年6月の城西大学の同様の調査で、「大変満足した」⁽²⁹⁾「やや満足」の合計が61%であったことと比較しても、TCUの数字は遜色ない。もちろん、1クラスの受講者数や、オンライン授業の種類の違い等がそこにあることから、規模の違う大学との単純な比較は困難である。

III 質的調査とその結果

① 質的調査の概要

質的調査におけるデータ収集、およびデータ分析は、マイケル・クイ

(28) 東京大学新聞社によるアンケート調査：調査期間：2020年7月15日－19日、調査方法：オンライン、対象：東京大学学部1年生－修士1年生、回答数：259 (https://www.todaishimbun.org/online_class20200808/；2020/9/11 確認)

(29) 「オンライン講義に関する学生アンケート結果概要報告」調査期間：2020年6月1日－6月10日、調査方法：オンライン、対象：在学生7,858名 (<https://www.josai.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00046933.pdf>；2020/9/11 確認)

ン・パットンの著書、Qualitative Research and Evaluation Methods に記述されたグラウンデッドセオリー⁽³⁰⁾のガイドラインに沿って実施された。質的データの収集は、6月中旬から下旬かけて実施されたアンケート調査の自由記述部分に加え、オンラインのグループインタビュー、および個別インタビューを通して行われた。

アンケート調査の中の自由記述の部分では、「春学期のオンライン授業の長所について、あなたの自由な意見をお聞かせください。」「春学期のオンライン授業の短所について、あなたの自由な意見をお聞かせください。」というオープンエンド（回答の内容や仕方に制限を加えない）な2つの質問がなされ、質的なデータが収集された。

7月22日にTCU生14人を対象に実施されたオンライン・グループインタビューが、さらに7月25日から8月11日の間に、TCU生7人を対象にオンライン・個別インタビューがそれぞれ実施され、質的なデータが収集された。インタビューの対象となったのは、春学期のオンライン授業のITに関わる部分において教員を補佐する役割を担ったクラス・アシスタントの学生、21名であった。クラス・アシスタントは、自らが学生として履修したクラスでは当事者として、アシスタントとして参加したクラスでは、その様子を第三者として経験（観察）している。またクラス・アシスタントに春学期の新入生は含まれていなかった。したがって彼らは、コロナ前の対面授業とコロナ禍のオンライン授業の双方、そして千葉県印西市のキャンパスにおける学生生活と、オンラインでの学生生活の双方を経験している。以上のような共通点から、この21名は本研究の対象として相応しいと判断された。

順序としては、はじめにグループインタビューが実施され、それに参加することのできなかった学生を対象に個別インタビューが実施された。双方のインタビューにおいて、「オンライン授業の感想や考えられる改善点等について自由に述べてください。」「春学期の学びの中での信仰の成長や

(30) Michel Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods* (Thousand Oaks, California: Sage Publications, 2002)

霊的形成について自由に述べてください。」というオープンエンドな2つの質問がなされた。以下に、これらの方法で収集された質的データの分析、具体的には、パットンのグラウンデッドセオリーの方法論に則り、収集されたデータをさまざまなカテゴリーに分けた後、そこからデータをまとまりや概念として再構築していくプロセスの中から浮かび上がってきた事柄を、5つの項目に分けて紹介する

② 質的調査の結果と分析

(a) 「利便性」はオンライン授業の好影響を支える重要な要因である。

アンケート調査の結果から、8割以上の学生がオンライン授業に対して「とても満足」または「まあまあ満足」と回答したことはすでに紹介したが、アンケート調査の自由記述の部分からは、オンライン授業における「利便性」がポジティブなキーワードとして浮かび上がってきた。以下にそれをサポートする記述を列記する。

利便性に関するコメント

「移動時間がかからず、休憩時間も有効に使える。」

「移動時間が大幅に減るため、自分の時間を確保しやすい。」

「時間を最大限活用できる。」

「学園内にいるときより忙しくないので、十分に課題、学習の時間が持てる。」

「体調が悪くても授業を受けられる。」

「みんなが向き合って授業を受けられる。」

「教室での、パワーポイントに比べて画面共有が見やすい。」

「チャットで質問したり、話したりできるので他の人に迷惑をかけないで良い。」

「ブレイクアウトルームでは時間が設定されている為長引く事がない。」

「資料もデータで共有していただけるので、あちこち探さなくてよくて

楽。」

「授業の録画や資料がTCU オンラインにアップされること。」

「録画もされているので復習がしやすい。」

「録画された授業を何度も見返せる。」

「時間はかかるけど何度も復習ができる。」

「先生のパワポをもう一度見返せる。」

「授業を欠席した場合でもクラウドレコーディングを後で聞くことが出来るので授業に遅れるという不安がない。」

「課題が提出しやすい。」

「授業の資料共有が充実している。」

「目の前に共有資料がでてくる。」

「チャットで質問が出来る。」

「普段手を挙げるのが恥ずかしい人もチャットなどで質問をしやすい。」

「受講者が常に前を向いているために自分に対しての視線が気にならないので質問しやすい。」

「授業終了後に片付けと先生のタイミングを計る必要がなく、先生に質問しやすい。」

「(寮が閉鎖されたため) 家族と共に暮らせる。」

「プライベートな空間で先生の話静静地に聞けることは非常に良い。」

自由記述の中には、「利便性」がもたらした具体的な効果に関するコメントも多く見られた。そこには遅刻や欠席の減少、緊張感やストレスの減少、さらには集中度の向上などが挙げられている。以下にそれらを列記する。

利便性の効果に関するコメント

「(授業で) あまり緊張せずにできるところ。」

「遅刻、寝坊が少なくなった。」

「遅刻・欠席が減った。」

「先生と一対一で授業をしている感覚になれる。」

「グループセッションに分かれて話し合う時のストレスが減った。」

「移動や対面でのストレスや疲れが少ない分、集中的に学べる。」

「リラックスして受けることが出来る。」

「雑談にならない。」

「全員の顔が見えるので個人的には発言しやすい。」

「周りが気にならないので、対面授業よりも集中しやすい。」

「偉い先生とすごく喋りやすい。」

「対面授業ではそれぞれ指定席があり、グループワークが毎回同じようなメンバーになってしまう。しかし、オンライン授業ではランダムでブレイクアウトルームに行くため、今まで関わってこなかった人と関わることができた。」

「見る画面がひとつだから集中出来る。」

「TCU オンラインに資料があげられることによって授業でメモを取らなくてもいいので、より集中して授業を聞くことができるようになった。」

「討論では学生全員の顔をみることができ、かえって豊かになった。」

「対面でないからか先生の話の脱線がそこまでない。」

約5割の学生が「オンライン授業」に対し、彼らの信仰の成長や霊的形成に好影響を与えていると回答したことを前章で紹介したが、これらの回答から、オンライン授業の持つ「利便性」は、それを下支えする重要なポジティブ要因のひとつであることがわかった。

(b)「肉体的、精神的負荷」は、オンライン授業の好影響に対するマイナス要因である。

アンケート調査の「②オンライン授業の内容や方法に関する質問」の中では、「オンライン授業は通常の（対面）授業より疲れやすいですか。」と

いう質問に対して、73.2%の学生が、「とてもそう思う」または「ややそう思う」と回答している。自由記述の中からは、オンライン授業がもたらす具体的な肉体的、精神的負荷に関して以下のような記述が見られた。

「目、腰、肩、体が疲れてしまう。」

「画面を見ることの疲れなどを解消しなければならない。」

「身体的な疲れが大きい。」

「目の疲れ、体の疲労がとても重いです。」

「授業や課題を含めて一日に5時間、6時間パソコン等で勉強することが体にすごい負担です。」

「全員に見られているという感覚が拭えず、ストレスが溜まる。」

「疲労感、主に目と肩など。」

「先生の声が聞き取りにくい時は大きなストレス。」

「電波障害や画面直視から来るストレスがある。」

「情報過多になっていると感じ、疲れを覚える。」

「画面越しに見られているという緊張感がありストレスになる。」

「対面授業に比べて課題の量が多く、負担が大きい。」

オンライン授業の「利便性」が、信仰の成長や霊的形成への好影響を支える重要なポジティブ要因のひとつであることがわかった一方で、オンライン授業のもたらす「肉体的、精神的負荷」は、その好影響を阻害するネガティブ要因の代表例であることも明らかとなった。

(c) オンライン授業における「対面の不在」には正と負の両面性が存在する。

オンライン授業の最大の特徴は、「対面（顔を合わせて会うこと）の不在」であると言える。本章の冒頭では、それによってもたらされるメリットである「利便性」について考察した。しかしインタビューを通して、「対面の不在」によってもたらされるデメリットも数多く浮かび上がってきた。

そこには、教員との対面の不在に加え、学生同士の対面の不在から生まれるデメリットも含まれていた。以下にそれをサポートする記述を列記する。

対面の不在に基づく不自由さに関するコメント

「授業の臨場感が感じられない。」

「実技ができない。」

「対面じゃないので、(クラスの) 空気を読むのが大変。」

「質問や意見を言いづらい。」

「人間関係の距離感がつかみにくい。」

「ディスカッションの不自由さがある。」

「質問したい時に、質問できない場合がある。」

「質問するには結構勇気が必要。」

「授業後に学生同士で内容の確認がしにくい。」

「新入生なので会ったことのない人たちとグループワークを初めからするのは抵抗がある。」

「授業前、休憩中、授業後、先生やクラスメートと雑談しにくい。」

「相手の気持ちや考えを理解できない時がある。」

「学生間の空気感を感じられないこと。」

「対面の空気の中で読み取れるものや、雑談の中で生まれるものがオンラインではない。」

「気軽な先生への質問や、友人同士の学びの励まし合いがしづらい。」

「クラスメートや先生とのコミュニケーションが少ない。」

「対話をしながら学ぶことが主であった授業や内容は、その特性を欠いたものになってしまう。」

「仲間と相談しながら学ぶことができない。」

「クラスメイトとちょっとした疑問について話せないのが残念。」

「人と自由にはなし合うことができない。」

さらに「対面の不在」は、以下のようなネガティブな効果を生んでいる

ことが指摘された。特にそこには「寂しい」「孤独」といった言葉も使われている。

対面の不在のネガティブな効果に関するコメント

「対面授業よりはどうしてもだらけてしまう。」

「メリハリがつかない。」

「集中できない。」

「あまり集中しない傾向がある。」

「周りの物に集中を削がれやすい。」

「授業の雰囲気をも十分に味わうことができないため、授業に対してのやる気が損なわれる。」

「1人で授業を受けている感覚になる時があり、寂しい。」

「休み時間にクラスメートと話せないこと、zoomで顔は見えているのに気楽に会話できないことが、孤立感につながった。」

興味深いのは、「教員へ質問すること」に関して、「オンラインはしやすい」と「オンラインはしにくい」という、相反する意見が見られたことである。「しやすい」と感じた学生は、「対面の不在」をポジティブに、「しにくい」と感じた学生は、それをネガティブに捉えており、そこに大きな個人差があることがわかった。

オンライン授業の「利便性」は、「対面の不在」によってもたらされるものでもある。教室に集まらなくても良いことや、すべてがデジタル化されていることなどによって発生する時間の余裕や手軽さが「利便性」を生むからである。しかしそれによって失われたものも、学生にとって非常に大きかったことがわかった。授業の満足度に関するアンケート調査では、「とても満足している」「ある程度満足している」という回答の合計が、83%であったことはすでに述べた。しかしアンケート調査「④寮や通学に関する質問」の中で問われた、「あなたは秋学期以降、印西市のTCUキャンパ

スに戻って『通常の対面型授業』を受けたいと思いますか。」という質問に対しては、「とてもそう思う」「ややそう思う」という回答が67.9%の学生からあった。オンライン授業にある程度満足し、またそこに大きな「利便性」を見出しているにも関わらず、学生の3分の2は、やはり対面に戻りたいと願っているのである。「対面の不在」によってもたらされるフラストレーションや孤独感、さらには心や体のストレスといった短所は、オンライン授業の長所や、対面授業によってもたらされる新型コロナウイルス感染への恐怖を上回るほど大きいものであると捉えることが出来るかもしれない。

(d) 授業への「集中度」や授業における「能動性」は、学生の信仰の成長や靈的形成と密接に関係している。

前章では、コロナ前にあったTCU生の信仰の成長や靈的形成に対する「ポジティブな影響」がコロナ禍において大きく減少する中、オンライン授業のもたらす好影響の減少度は少なく保たれていることを紹介した。またアンケート調査の「②オンライン授業の内容や方法に関する質問」の中には、「オンライン授業で、教員の熱意はあなたに伝わっていますか。」という質問があり、学生の88.4%が、「とても伝わっている」「やや伝わっている」と回答している。しかしそれでも、コロナ禍における信仰の成長や靈的形成に対する「授業」の好影響を示す数字は50%であった。言い換えれば、オンライン授業を受けた半数の学生は、そこから好影響を受けていないということでもある。インタビューでは、以下のような発言も聞かれた。

「そもそもオンライン授業に靈的涵養を期待していない。」

「もともと授業を通して靈的に養われることをあまり意識していない。」

「普段から、TCUを通して靈性を養ってもらいたいという感覚は持っていない。それは自分の責任であると思っている。」

オンライン授業がもたらす、学生の信仰の成長や霊的形成に与えるポジティブな影響に関しては、そもそもすべての学生がそれを期待しているわけではないことが、上記のような発言から明らかとなった。しかし一方で、学生の授業への取り組み方によっては、そこからポジティブな影響を受けることが可能であるということも、インタビューデータから伺い知ることができた。さらに質的分析を通して、そこには授業への「集中度」や、授業における学生の「能動性」という重要な2つのキーワードがあることがわかった。以下にそれらを示す発言を区別して列記する。

集中度に関するコメント

「授業を通して（霊的に）養われるかどうかは、授業を聞く学生の集中度にも大きく左右されるのではないかと思う。」

「自分の集中度に左右され（対面と比べ）霊的に受け取れることが少ない。」

「対面の時は、クラスメートと一緒に、集中しようという思いがあった。」

「授業を受け取る側の姿勢の課題が大きいと思う。」

能動性に関するコメント

「生徒が発言しやすい授業では、霊的養いがあった。一方、生徒が発言しにくい授業では、霊的養いが無かった。」

「他の学生との意見交換が、霊的な涵養につながった。」

「（オンライン授業の中の）学生同士の会話や、触れ合いを通して、霊的に養われることが多かった。」

「クラスの中でのブレイクアウト・セッションの分かち合いが良い励ましとなった。」

「ブレイクアウト・セッションが豊かなクラスほど、霊的な満たしを感じた。」

「実践の伴う学びが減ったことが、靈的涵養にとってネガティブに作用したと思う。」

「他の学生との意見交換が、靈的な涵養につながったと思う。」

「グループディスカッションの活用は（靈性の涵養の）鍵だと思う。」

「特に熱意のある先生は、生徒の意見を積極的に聞く姿勢を持っている先生だった。」

「靈的な養いの機会は十分提供されていたが、積極的に参加しなくてはそれは起こらない。」

学生が授業に集中することは、学生自身の責任であるのと同時に、教員の授業運営やクラスデザインとも大きく関わっている。授業に対する学生の態度やレディネス（準備度）もさることながら、教員が学生の意見を積極的に聞くことや、学生同士のグループワークを奨励するといった、授業における学生の「能動的」な関わりをより強調するクラスでは、学生の「集中度」が向上し、さらにはそれが、学生の信仰の成長や靈的形成にも影響することがわかった。さらには以下のような発言もあった。

「授業の中で、先生の人格に触れるような関わりができたと感じた時には、靈的な養いがあった。」

「オンライン授業では、先生が授業の本筋から外れて、体験談やあかしを語る機会が少なかったように思え、少し残念だった。振り返れば、そのようなことから靈的に養われることは多かったと感じる。」

教員が授業の中で、自己を開示するような取り組みをするとき、それが学生の靈的な養いにつながる場合があるということもわかった。

（e）授業外の学生同士のインターアクション（相互活動）が、学生の信仰の成長や靈的形成に大きく影響する。

アンケート調査の結果から、コロナ前においてもコロナ禍においても、

学生の信仰の成長や霊的形成に大な影響を与えるのは、学生同士のインターアクションであることがわかった。またそれは授業内においても授業外においても同様に重要であることが質的データから浮かび上がってきた。

コロナ前の学生同士のインターアクションの重要性に関するコメント
「授業よりも、それら（信仰の成長や霊的形成）は自然発生的に起こっていた学生同士の会話や、触れ合いを通して、霊的に養われることが多かった。」

「TCU では寮生活や祈祷会、チャペルを通して霊的に成長させられる部分が大きかったと思う。」

「休み時間などで、学生同士のちょっとしたお喋りの時間が無いことが残念。」

「他者とのやりとりを通して、自分の考えをまとめていく機会を恋しいと感じる。」

「寮にいれば、礼拝や祈祷会に誘われるし、賛美の声も聞こえるし、自動的にそれらに参加する。自宅では自発的に行わなくてはならないのが難しい。」

「他の学生との意見交換が、霊的な涵養につながっていたと思う。」

「普段は、寮生活や祈祷会、チャペルなどで養われていたと思う。」

「主体的に人と関わることが少なく、それが辛いと感じた。」

「授業を始めるのも終わるのも、ワンクリックでできてしまう。対面授業の前後にあった、他の学生と授業について語り合う時が失われてしまい、それば霊性の涵養にネガティブに作用していると思う。」

「自分の霊性を保つ責任を自分一人が負っているような感覚がある。寮生活の中で、共に祈り、共に学ぶという要素が無くなってしまったことが辛い。」

「クラスの前後で自然発生的に、なにげなくぼんやりと神様について話す機会が無くなってしまったことが辛い。それが自分の霊性にとって

重要であったことを今あらためて認識している。」

「授業時以外に授業のことを話すことが難しい。」

「オンラインでは、リアルなコミュニケーションができない。」

「友人が近くにいないので課題等について相談できない。」

「授業で学んだことを実践する場や、共有する場が極端に減った。」

「寮生活の中で、共に祈り、共に学ぶという要素が無くなってしまったことが辛い。」

「自分の霊性を保つ責任を、自分一人だけで負っているような感覚がある。」

前章では、コロナ前の好影響のトップを占めていた、「TCU 生同士の交わり」(74%) が、コロナ禍では、「TCU 生とのオンラインでの交わり」(53%) にとって変わり、影響の度合いが 20% 以上下落したことを紹介したが、上記の発言から、その理由が明らかとなった。しかしコロナ禍の好影響を見ると、オンラインを主な媒体とした「TCU 生同士の交わり」(53%) が、依然として学生の半数以上に良い影響を与え続けていることがわかる。さらにその数字は、「オンライン授業の内容」(50%) の影響を上回るものでもある。

「TCU 生同士のオンラインでの交わり」に関しては、毎週 30 分、担任教員と 5—15 人ほどの小グループで開催される小グループチャペルや、学生が自主的に始めたオンライン祈祷会への言及が多く聞かれた。以下にそれらを列記する。

小グループのポジティブな作用に関するコメント

「小グループチャペルで祈ってもらえていると感じたことが良かった。」

「コロナで色々制限されている中で、例えば小グループチャペルでの分かち合いは、最もリアリティーのある、霊性の涵養の機会であると思う。」

「小グループチャペルでは、先生が話すのではなく、学生同士が語り合ったり、祈りあったりする時間であり、やすらぎや癒しを感じた。」

「小チャペルが増えたことはとても良かった。」

「小グループチャペルは、分かち合いの時があり、それも良かった。」

「小グループチャペルの価値は、ブレイクアウトルームでなるべく多くの人と、個人的な交わりにある。」

「TCU から提供されたチャペル動画より、同時間に集まれる小グループチャペルが良かったと感じた。」

「オンラインで祈り合うことの中に霊的涵養を感じた。」

これらの発言から、小グループチャペルのより大きな価値は、担任の一方的な話しにではなく、学生同士の交わりにあることがわかった。しかし一方で、以下のようなコメントも聞かれた。

小グループのネガティブな作用に関すること

「小グループチャペルは良いと思うが、しんどい時は、その場が辛く感じることもある。」

「小グループチャペルで学生に負担となる発表は、時間带的に勘弁して欲しいと思う。」

「小グループチャペルは、週の終わりで疲労がMAX の時間帯で疲れる。」

「小グループチャペルは良かったが、一度休むと敷居が高くなることもある。」

本来なら学生のストレスや孤独感を解消し、信仰の成長や霊的な形成をもたらすべき活動が、かえって学生の負担となることもあり、その持ち方には工夫や配慮が必要であることもわかった。

IV 調査結果に基づく提言

ここまでアンケート調査、およびインタビュー調査によってもたらされた量的、および質的データとその分析が指し示す事柄を見てきた。本研究の目的は、第 I 章にも記述した通り、これらの調査から得られたデータを分析し、学生の信仰の成長や霊的形成に着目しつつ、それを教育の改善や学生のケアに結びつけることである。本章では、それらの分析に基づいた、学校側に出来る具体的な取り組みに関する提言を紹介する。

① 授業に関して

学生の精神的健康状態と信仰の状態の良好さの間には、明らかな「正の相関関係」が見られた。さらにオンライン授業が、学生の信仰の状態に好影響を与えていたことも明らかとなった。授業のクオリティーの多面的な底上げを図ることは、学生の良い学び、さらには良いケアにつながると言えるだろう。以下にそのための具体的な 3 つの提言を挙げる。

(a) オンライン授業の「利便性」を最大限に活用する。

オンライン授業の最も大きな長所のひとつは「利便性」であり、それを最大限に活用することは、学びの充実につながる。学生の声を聞きつつ、オンライン授業における教員の IT 技術の精度（画面共有やチャット等の IT 機能の習熟度）を上げるため、専門家による IT 講習会の実施や、職員による授業サポート等を拡充させることが重要である。

(b) オンライン授業の中で、学生の「集中度」の向上を意図した取り組みを行う。

オンライン授業によって生じる体や心のストレスに関する発言が、多くの学生から聞かれた。授業のクオリティーを考慮しつつ、効果的に休憩時間を入れることや、課題を軽減することを新たに検討するべきであろう。

また教員からの個々の学生への声かけを含め、学生がホッとできる学びの環境を作ることや、教材作成の工夫等を通して、学生の「集中度」を向上させることを目指すべきである。

(c) オンライン授業の「能動性」を向上させる。

教員に対して質問しやすい環境を作るための新たな工夫や、グループディスカッションの機会等を通して、学生自身が主体的に授業に参加する仕組みを作ることが、学びの「能動性」の向上につながる。オンライン授業特有の、学生の「孤独感」を少しでも解消し、クラスメイトと協力し合うことに喜びを見出せるような教育環境を構築することが重要であろう。

② 授業外の取り組みについて

学生の最も良い相談相手が他の学生であったことや、相談相手のいる学生の精神的健康状態と信仰の状態に対する自認が良好であったことが研究の結果から明らかとなった。授業中はもとより、授業外でも彼らが積極的に交わることでできる機会や仕組みを作るために、以下に3つの取り組みを提言する。

(a) 小グループチャペルを充実させる。

現在 TCU では毎週 30 分、5—15 人の学生と一人の教員による小グループチャペルが実施されている。それは学生同士の交わりの機会であり、学生からの評価は比較的高い。しかし、その持ち方によっては、かえって学生の負担を増やしてしまうことや、一部の学生の足を遠のかせたりすることもあった。一人でも多くの学生の信仰の成長やケアにつながるような小グループチャペルを作るため、学生からの意見を聞いて、それを充実させることが大切である。

(b) 学生同士の主体的な交わりを後押しする。

調査の中から、学生主催の祈禱会や、ライングループといった学生自身

が企画・運営する学生同士の交わりの存在と、その良い効果が浮かび上がってきた。大学が直接的に関わらなくとも、そのような主体的な取り組みを奨励し、また後押しすることができる。大学のホームページの掲示板を学生に開放したり、大学から学生に送られる通信メールに、そのような取り組みの情報を掲載したりすることも可能であろう。

(c) オンラインによる学生相談やカウンセリングの機会を作る。

学生同士の交わりを奨励する中で、そこから漏れてしまったり、自らそのような輪に入っていくことを躊躇したりする学生の存在も調査の中から浮かび上がってきた。13.3%の学生が、「相談相手がいないが欲しい」、もしくは「相談相手がいないし、欲しくない」とアンケートに回答している。学生の孤立を防ぐ上でも、日常的な相談であれば教員や職員が、また専門的な心のケアを必要とする場合には、臨床心理士が学生の相談相手となることのできるような、アクセスしやすいシステムを作るべきである。

V 研究上の課題について

ここまで量的、および質的な調査データとその分析の結果、さらにはそれらに基づく提言を見てきた。研究のために用いた方法論やそのプロセスも開示されてきたが、本章では本研究に内在するいくつかの課題に焦点を当てる。

① 研究の時期に関わる課題

本研究におけるデータの収集は、TCUにおいてオンライン授業が開始してから1ヶ月半から2ヶ月半が過ぎた、6月中旬から7月中旬の間に期間に実施された。一方、本稿は8月の下旬から9月の中旬にかけて執筆されている。調査が終了してから、9月上旬までのわずかの間でも、新型コロナウイルス感染の状況は非常に流動的である。6月から7月にかけては、秋学期の授業形態を、主に対面とハイフレックスにする準備がなされたが、9月

から始まった授業数の約8割、受講生数の割合では全体の約9割が、依然としてオンライン形式のみを用いて学んでいる。大学は、新型コロナウイルス感染の状況を見極めつつ、弾力的な対応を取ろうとしているが、全面的な対面授業への復帰にはまったく目処が立っていない。アンケート調査が開始された6月中旬は、緊急事態宣言解除の直後（約2週間後）で、社会の中には、「このまま終息に向かうのではないか。」という楽観論が多く存在していた。アンケートに答えた学生の中にも、「オンライン授業は春学期だけで、秋学期には対面授業に戻れるだろう。」「オンライン授業は大変だったが、振り返れば良い経験になったと言えるようになるだろう。」といった楽観論もあったことだろう。現時点では、そのような感覚がアンケートの記入に与えた影響を推し量ることは難しい。研究者は確かな方法論を用いて研究データを収集することが出来たと感じているが、新型コロナウイルス感染の流動性が、インタビュー調査を含む研究全体に与えた影響に関して現時点で判っていることはあまりない。それは本研究の大きな課題であると言える。

② TCU の独自性に関わる課題

TCU は文科省認可のキリスト教主義の四年制大学であり、数多くの日本のキリスト教系学校によって構成される「キリスト教学校教育同盟」のメンバー校でもある。研究者は、今回 TCU において収集されたデータやその分析の結果が、広く他のキリスト教主義学校や、その他の宗教系学校において活用されることを望むが、その「汎用性」については大きな疑問が存在する。すでに述べられているが、TCU にはクリスチャンコードがあり、専任教員と学生の全員は、キリスト教の洗礼を受けた者である。アンケート調査やインタビュー調査のキーワードでもある「信仰の成長」や「霊的形成」も、学生全員が自らを信者であると認識していることから、それを用いることが必要であろうと判断された。しかし一般的なキリスト教主義の四年制大学のみならず、その他の宗教系大学における学生の信者率は決して高く無い。加えて、TCU の学生数は 170 人と非常に少なく、日

本最小レベルの四年制大学である。これらのような特色は、TCUにおいて収集されたデータやその分析の結果の「汎用性」に対して、大きな壁となるだろうと推察される。

③ 質的研究の性質に関わる課題

本研究は、量的研究と質的研究を用いた混合研究であるが、質的研究はその性質上、データ収集から分析に至るまで研究者の主観が重要な役割を果たすものであり、またそれを抜きにしては成立しないものである。それは質的研究にいつもつきまとう短所である。本研究は、マイケル・クイン・パットンによって示された質的な研究方法（グラウンデッド・セオリー）を用いて実施され、研究者は細心の注意を払い、客観的なデータ収集、方法論に則った丁寧な分析に努めたと自負しているが、本研究の結果を信頼に値するものと見るか、あるいは有用性に欠けるものとするかは、当然意見が分かれるところであろう。しかし一方で本研究は、第三者の推論や試論に基づくものでも、過度に一般化された人間論や文化論に基づくものでもなく、現象が実際に起こっている現場、つまり「グラウンド」（地面、地べた）から直接に得られた情報を分析し、そこから沸き上がってきたデータを通して構築されたものであり、その結果は現実に近いものである可能性を持っている。

VI おわりに

「オンラインで続けていくなら、コロナのこと以外での、オンラインで続ける意味をしっかりと提示しないと、学生としてはそれぞれの実家で、オンラインで学ぶことで何を得ることができるのかがはっきりしません。ただ時間だけが無情に過ぎてしまうだけで、コロナで大変だった一年だな、考えさせられたな、では無責任な気がします。特に新入生や、卒業生にすれば非常に重要な一年なので、その時間を預かっている上で、学生のためにどうするべきなのかを考えていただきたいです。」

これは、無記名のアンケートの自由記述の部分に記入された一文である。文面からは、記入者の苦悩やフラストレーションが痛いほど伝わってくる。学生たちは、大学で学友と机を共にして学ぶことも、またチャペルで信仰の友と声を上げて賛美歌を歌うことも許されず、オンラインでの授業や、オンラインでの学生生活を強いられている。本研究の中で、上記のコメントと同様な意見が数多く見られたということではないが、TCU生の中にはコロナ禍において、同様に苦しむ者が数多くいるであろうことは容易に想像ができる。いや、学生のみならず、大学の教職員の中にも、同じような思いがあることだろう。新型コロナウイルス感染の猛威が収まらず、出口が見えない今は、社会全体が「我慢」する時であるとも言われている。この「我慢」するということに関して、国立精神・神経医療研究センターの認知行動療法センターのセンター長であり、クリスチャンでもある堀越 勝は、心理学者の立場から以下のように述べている。

我慢は必ずしも良いものとは限りません。また悪ものとも限りません。我慢には、有益なものもあれば、有害のものもあるのです。有益な我慢とは……目的のある我慢です。そのような有益な我慢は、人を成長に導きます。その過程は確かにつらくとも、こころのなかにぽつかりと明かりが灯るような希望が見えているものです。我慢することを通して人に対してやさしくもなり、人間としての懐も深くなります。……一方、有害な我慢は苦々しい思いを生むだけの、目的のない「させられている我慢」⁽³¹⁾で、自分の意思で選んでいない我慢です。

また新約聖書、ローマ人への手紙5章3節、4節にも、「忍耐」することに関して、以下のような記述が見られる。

(31) 堀越 勝『感情のみかた』いきいき株式会社出版局、2015年、93-94頁。

それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。⁽³²⁾

堀越は、我慢する上で、人が目的意識を持つことの重要性を語っている。しっかりした目的を持つとき、人は苦難をただやり過ごすだけではなく、その中で人間的に成長することが出来ると語っている。また聖書は、苦難には目的がある。それはそこから生み出される品性や希望であると教えている。

本研究では、新型コロナウイルスの蔓延に伴う様々な不自由さの中で、学生の信仰の成長や霊的形成に着目しつつ、授業を改善することや、学生同士の交わりの機会を増やすことを提唱した。もちろん重要ではあるが、それらは対症療法的であるとも言えるかもしれない。上記の学生の声や、忍耐に関する堀越の話を聞く中で、大学が取り組むべきもうひとつのことを思わされた。それは学生がコロナ禍にあって、個々の目的や目標を見出すことができる手伝いをするということである。この困難な時期を、学生自身が目的意識を持ちつつ、創造的な営みを持って乗り越え、その先に希望を見出すことが出来れば、今の苦難は、信仰者としての学生の大きな成長につながるからである。

(32) 新改訳聖書 2017、新日本聖書刊行会、2017 年。